



皆様のおかげで 復興することができました。

理事長 西田 良枝

3月8日、建て替えが完成した新しい拠点で神事と開所式を行い、震災からちょうど一年目の今年3月11日、「とも」は元の場所に引っ越しを終え、新しいスタートを切ることができました。長い間、物心ともにご支援いただいたお一人おひとりに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

液状化で全壊した拠点にいらなくなり、この先どうしたら利用者さんにサービスを提供できるのか？職員たちの安全を守れるのか…24時間365日のサービスを行う私たちは、どの時間をとってみても休むことはできないのですから、一瞬一瞬で決断を迫られていました。

ライフラインも途切れ、簡単には復旧せず、毎日毎日、水をくみ、仮設トイレに行き、計画停電をすり抜けながら事務をして…等々。事態の深刻さは増すばかり。そんな中、ご自身たちも被災しているにもかかわらず、すぐに、「とも」の拠点に代わる建物や荷物の保管場所を提供くださった地域のNPO法人タオさんや、資材不足、人手不足のなか、仮設の会議室を急場で工事してくださった業者



さん、引っ越しや水汲みなどの支援に遠くから駆けつけてくださった方々。

そんな、直後のご支援をいただけたからこそ、24時間どんな時間帯も変わらず利用者さんのもとへサービスを届けることができました。液状化で流出した土砂が粉じんとなって視界が遮られるほどに舞い、電線が垂れ下がり、水がそこかしこで噴き出している街の中を、マスクやゴーグルをつけて自転車や徒歩でサービス提供を続けてくれた職員、一時ケアセンターなどで地域の障がいがある方を受け入れた職員、慣れない場所、グーグー詰の仮の事務所でも頑張り続けてくれた職員、所属先、常勤・非常勤を問わずみんな自分も被災しながら、業務を続けてくれたことは、ほんとうに大変なことだったと思います。厳しい環境の中でいっしょに頑張ってくれたこと、感謝しています。

この紙面で職員への感謝を述べることに、違和感を持たれる方もいらっしゃるかもしれません。私たちが頑張ることができたのは、当事者の方の存在があったからには



かなりません。それは言うまでもないことですが、車の両輪のような利用者さんと私たちだとすれば、いつもは黒子に徹しているけれども、未曾有と言われる災害時においても地域での暮らしをまったく当然のように支え続けてくれた職員ひとりひとりの存在をここに記しておきたいなと思いました。

「総会・入職式及び復興感謝の会」とお花見で再スタートを切りました。

復興するにあたっては、地域活動支援センターともの今川センターの利用者さんには、みんなのフリースペースの場所の変更にご協力いただきました。ありがとうございました。

ご寄付は、全国の多くの方々からいただきました。利用者さんが少ない収入の中から。今は亡き利用者さんのご家族が、今後も頑張っしてほしい。「とも」が市民団体の頃から応援してくださっている方たち、全国の地域福祉事業を行う方たちから…。

メールやお手紙や励ましの言葉は数えきれないほど…。ほんとうに様々な方たちの支援の中にいることを実感した一年でもありました。

お礼の気持ちをお伝えしたく、復興の一つの区切りとして、毎年行っている「とも」の総会と入職式に、今年は復



興感謝の会を加えて行いました。また、一年前、震災直後にも日常生活を取り戻すため、みんなの元気を確認し合うために、迷いながら半分後ろめたい気持ちがありながら行った「とも」恒例のお花見でしたが、今年は新入職員19名の歓迎もあり、160名余りの関係者の方々から、お祝いのお言葉をいただき、笑顔のお花見を行うことができました。

このお花見のように、老若男女、職業も障がいがあるなしもいろいろな立場も超えて、いろいろな人がいて、みんなが暮らしやすい街であつたらいいなあ、誰も排除されず理不尽な思いもしないでいられるように…美しい桜を見ながら今年もそう思いました。



「とも」で行っている事業やサービスはそのためであって、毎日の仕事はそこにつながっていることを、復興の再スタートを機に、改めて、職員全員で確認し共有に努めたいと思っています。

「とも」は復興しましたが、それを喜んでいるだけではなく、今だ、復興に至らない地域や人々がいらっしやることに心を痛めながら、エールを送りながら、自分たちでできることは行動していくことを思いながらこの原稿を書きました。

浦安市地域自立支援協議会 活動報告



浦安市地域自立支援協議会の23年度の活動状況について報告いたします。

全体会は、2回開催。相談支援事業の活動報告を行いました。全体会の構成委員の総数が50名となり、報告を聞くだけでなく、全体会でも浦安の障がい者福祉について議論ができる様に会議のあり方を検討すべきであるとの意見が出されました。

幹事会は、7回開催。前半は総合相談から提出された事例に基づく地域課題の検討を中心に、後半は各プロジェクト会の進捗状況について意見交換がなされました。幹事会で議論された地域課題の一つが、障がいのある児童の児童育成クラブの利用です。重度心身障がいの女の子で、難病による発作もあります。去年3月、お母さんから「児童育成クラブの利用ができなくて困っている」と相談が入りました。発作や介護の対応が出来る職員がいない、本人の安全が担保できる環境が無いという理由で、児童育成クラブの利用について行政との話し合いが続いていました。自立支援協議会の幹事会の委員の皆さんにも、障がいのある児童の児童育成クラブの利用について検討して頂き、浦安市における児童育成クラブの障がいのある児童の利用推移や市の方針等を確認し、障害福祉課も日中一時支援事業所と児童育成クラブの連携を担当課に提案。市民ひとりの事例から、理念や方針、実態について協議会で分析検証し、浦安市の障がい福祉の方向性を考えていく協議会の役割が全うされた事例です。

そのご本人であるS.Mちゃんは、今年の4月から、とても楽しく、地域のお友達と一緒に放課後を過ごしています。

今年は、障がい者福祉計画策定委員会も6回開催され、平成24年度から26年度の計画が完成しました。

啓発・広報プロジェクト会は、2回開催。障がいの有無に関わらずともに暮らす街づくりの啓発ツールの一つとして、サポートブック作成に取り組みました。障がいのある人が日々の生活で感じる困り感や、障がい特性の理解促進、そして、障がいがあっても、ひとりの対等な市民としてのあたり前の暮らしをサポートするツールとして、地域

に配布できるよう準備を進めました。作業部会も稼働し、24年度に浦安版サポートブックが完成する予定です。

就労支援プロジェクトでは、就労訓練に必要な業務確保のための地域連携を中心に議論。23年度は年3回開催。浦安市障がい者就労支援センターの活動報告、障がいの重い人たちの就労支援である就労訓練体験制度についての報告がありました。主な議論としては、共同受注窓口及び共同販売センターです。就労訓練事業所が抱えている課題としては、営業担当職員を雇うことができない、販売拠点の運営ができない、家賃の高さなどがあり、仕事の受注や販売には限界があります。そこで、企業や行政から一括して仕事を受け、その仕事を分配する共同受注窓口があれば良いのではないかとという提案がありました。

特別支援教育プロジェクトでは、障がい者福祉計画、個別の指導計画の作成状況、特別支援教育に関わる教職員の研修状況や専門職の構成などについて話し合いました。委員からは、

市内の体制や、障がい者福祉計画についての修正、加筆事項等の説明だけでなく、保護者が学校で感じる悩みやジレンマを会議の場に反映させていき、体制や各機関の役割分担等を整理していく会議のあり方が良いのではないかとという意見もありました。

事業所制度プロジェクトは、3回開催。24年度4月からの自立支援法改正に伴う浦安市の相談支援体制について議論しました。障害福祉サービスを利用する際には、原則、サービス等利用計画が必要となり、その計画作成を担う相談支援事業所が増えていきます。障がいのある当事者、及び、その家族に密接に関わってくる相談支援。今後の浦安市の相談体制の在り方について、24年度も議論を継続する予定です。

【浦安市障がい児・者総合相談センター 矢富】

24 時間対応定期巡回・随時訪問 モデル事業 報告

平成23年7月25日から平成24年3月31日まで、厚生労働省の研究事業である24時間サービスを実施しました。

この事業を通し、高齢者が安心して在宅での生活を続けるためには、何かあったときのセーフティネットは確かに必要だと再認識しました。利用者さんの声からも持続可能な制度とする必要があると思われました。

また、24時間体制でのサービスが必要な方は、どちらかといえば重度の方が多いため、医療との連携は欠かせません。これについてはケアマネージャーを中心とすることで密な連携が図れることは実証できました。

一方、課題として見えたことは、これを支える側となると、現

実は、24時間途切れることなくスタッフを手配することは、かなり厳しいということ。24時間体制のセーフティネットとしては当然、想定できるさまざまな状況に対応できるようそれなりの有資格者を配置する必要があるため、スタッフの質の面でも量(スタッフの数)の面でも、財源の裏づけがなければ運営は難しいと思いました。

業務に見合うだけの報酬がなければと言って自治体や事業所が立ち止まっては、重度の高齢者の在宅生活は直ちに困ってしまう現実もあります。

事業所としては持続可能な制度となるよう、自治体や国への働きかけを行っていきたいと思っています。

23 年度の実績と 24 年度の方針

法人本部

昨年 3 月の震災により本部が全壊いたしました、設立 10 周年の節目として 6 月に式典を挙行し、記念誌を発行しました。西田理事長による「ひとりから始まるみんなのことくパーソナル・アシスタンスとも」の実践」を刊行、そして震災より 1 年後の本年 3 月 11 日に皆様のご支援により本部復興を終えました。本年度は新規事業として障害児通所支援事業と日中一時支援事業を予定しています。

地域活動支援センター事業部

23 年度は、震災の影響でフリースペースの拠点を移転しながらも、まずは、余暇も仕事も拠点があるということの大切さを実感させられ、更に、利用者さん同士の仲間関係や自信をもつことがより主体的な活動へ繋がるのだと実感させられた 1 年でした。24 年度は、利用者さんがより主体的に活動でき、そこに地域の方々も巻き込める地活となっていきたいと思います。



居宅介護支援事業

23 年度の特徴として、入退院を行った利用者様が多くいらしたことです。入退院時の支援として、医療機関への情報提供や関係者会議等、医療連携を行いました。特に退院時のカンファレンスの参加はとても重要です。退院後、安全で快適な在宅生活を取り戻す為の大きな鍵となります。今後も利用者様に寄り添い支援していきます。

浦安市障がい児・者総合相談センター

23 年度の総合相談は、相談室、事務スペース等の拠点を失くしながらも、何とか携帯電話を活用して、24 時間 365 日の相談体制は維持できました。しかしながら、実績としては 22 年度を下回る結果となりました。24 年度は、拠点も整備され、心新たに、関係機関の皆さんと連携しながら、障害のある当事者の方、そのご家族が気軽に電話や立ち寄れる相談窓口として、より一層、業務に励みたいと思っています。

就労支援事業部（浦安市斎場売店）

斎場売店の運営も 7 年目となり、当事者雇用の職員が 2 名います。今年度、採用になった職員は、重いものが持てない、作業がとてもゆっくりという傾向がありました。重い物については、ビールケースの扱い方のコツ、途中で一回止めて上げ下げすることを教え、ゆっくりということにたいしては、一本ずつ扱うのではなく片手の指に二本ずつ引っ掛けることを教え、スピードアップを図ることが出来ました。



24 年度は、あらたな研修への参加や実習生の受入などを積極的に行いこれからも、当事者雇用の職員が益々働く喜びを持てるような取り組みを行ってまいります。



パーソナルケアセンター事業部

23年度は震災により仮の事務所を拠点に何とか24時間365日、サービスを提供し続けました。24年度は、新しい事務所とケアルームを拠点に、10年間で積み上げてきたノウハウを先の10年20年に繋がるように基盤の整備を進め、「とも」だからこそできる個別の支援をしていきます。

浦安市障がい者等一時ケアセンター

平成23年度も様々な緊急利用がありました。一時ケアセンターがあったことで障がいをもつ本人の地域生活が継続出来たり、年末年始、他事業所が休みになった時も24時間365日ケアを提供する一時ケアセンターはその役割を発揮できました。昨年10月より敷地内の散歩や近くのコンビニまでの買い物も可能となり、さらにケアの内容も充実しました。これからも利用者のニーズに応え利用しやすいセンターを目指します。



千葉県障害児等療育支援事業

この事業は千葉県から委託を受け、障がい児・者の療育に関する相談を受けています。平成23年度もわが子にあった療育にはどんなものがあるか？など具体的な相談が多く寄せられました。また、異年齢の子どもを持つお母さんたちが、おしゃべりや情報交換をする場として「交流スペース」も昨年に引き続き開催しました。お父さんや働いているお母さん達も参加しやすいように、日曜日の開催も検討していきます。

療育事業

10年以上継続して行っている8療育、どの療育もその目的や効果があります。専門家の講師をお招きして行っている療育、また将来大人になった時に趣味として余暇にもつながっていく療育、そして障がいをもつ本人だけでなく、きょうだいや保護者も一緒に家族支援という意味ももつ療育など様々。これからも参加者ひとりひとりの成長と参加しやすい療育をめざし、実施していきます。



後援会「ともと歩む会」のお知らせ

こんにちは。震災から1年が過ぎました。新年度を迎えても、諸々問題も山積で、気の抜けない状況ではないでしょうか。“とも”は、新しい拠点への移転を終え、総会と入社式を行いました。フレッシュで頼もしい仲間たちを迎えて、充実して頑張っていけるよう、見守って参ります。

4月8日に、お花見を開催致しました。お忙しい中、ご参加を頂いた皆様、楽しく過ごせましたでしょうか。また、多数のご寄付を頂きまして、誠にありがとうございました。

ご報告

社団法人中山馬主協会様から、助成金をいただき、震災で被害を受けた事務所の改修に伴う内装工事に利用させていただきました。

ありがとうございました。



第2回



●●● 波乱のフライト編 ●●●

さて、前回からお伝えしているこの旅行記。今回は研修先を選んだハワイに向かう道中でのお話です。

待ちに待った出発の日まで『必死』に体調を管理しながら、一緒に研修に向かう仲間たちと、着々と準備を進めて来ました。障がいの重い私は旅先にも普段と同じようなケアの環境を作らなければなりません。痰の吸引器や酸素の吸入器。血液中の酸素濃度を測るモニターなどの機械とそれらの付属品。食事に利用するポットやシリンジ(大きな注射器のような物で針は付いていない)等々、持って行かなければならない『必需品』だけでも普通に旅行される人に比べたらそれは沢山の準備が必要になります。そのどれかがかけても私の生命維持に関わるのです。健康な人たちが気軽に飛んでいくハワイも私にとっては大冒険。それでも『だから行けない』のではなく『だからこそ絶対行きたい』と考えるのは私の性格だと思います。

Staff Column

私は西田さんが成田空港に向かうところから、飛行機内の介助を担当しました。私自身、海外へ行くのは初めてだったので、西田さんより緊張していたかもしれません。飛行機に乗るためにバケットの車イスを使用しますが、この車イスだと呼吸状態が悪くなりやすい為、車内から排痰をして、痰が固まらないようにと必死でした。飛行機に乗るまでに、ラウンジで軽食を摂り、そこに芸能人がいたりしましたが、私は緊張が抜けず、先のことが心配でたまりませんでした。そんな私とは違い、西田さんは落ち着いていたので、さすがハワイに10回以上行っているだけあるなと思いました。飛行機に乗り込み、西田さんには寝てもらおうとポジショニングをつくったのですが、なかなか寝付けないようで私が先に機内食を頂きました。その後、ウトウトし始めたのですが、SPO2が上がらない・・・どうにか

います。そこで感謝するのは一緒に行こうと言ってくれたたのしい仲間たち。みんなに巡り会えた幸せがあるから、今回の旅行は何としても無事に行ってくるぞと密かに決意していました。

自宅から一緒に行ってくれたのは、テキパキと仕事をこなすリーダー格のHさん。私たち同期がいつも頼りにするしっかり者です。彼女と車で成田へ向かう頃にはもう胸の高まりが押さえられないくらいハイテンション! 空港で待ち合わせしたHYさんとTさんに会えたときにはこれから始まる楽しい時間にもう叫び出したいくらいでした。と、言うかちょっと叫んでいたそうです。

以前、別の航空会社でさんざんな事があったので一番心配だった搭乗手続きは、事前に航空会社と母が綿密なやりとりをしてしてくれたおかげで無事にクリア。税関も車いす用のカウンターが用意されているので問題はありませんでした。ただ、やっぱり時間がかかるのは手荷物検査です。なにしろ持って行く必需品が多い。テロ対策が厳しくなっから、以前にも増して飛行機に乗るのは一苦労です。

さらに極めつきはボディチェック。普段からショートヘアーでボーイッシュな私。いやな予感がやっぱりあたり、男性係官がやってきました。すぐにレディと気づいて女性係官に変わってくれましたが…。

搭乗前のラウンジには期待していたベッドが用意されてなく、仲間の機転でソファーを使い簡易ベッドをこしらえてしばし休息。無いものはみんなの工夫で乗り越えていくのはいつものことです。

夜も更けてきた21:30。いよいよ出発の時間です。優先搭乗で他の皆さんより一足早く機内へ向かいますが、車いすから座席への移乗、今まで乗っていた車いすを預けるために分解。着座用の装具に合わせシートベルトにジョイント

しなくては。自宅だったら、呼吸を助けるバイパップという機械をつけるのですが、電圧が足らず、使用出来ません。もう酸素ボンベをもらうしかないと、スチュワーデスに緊急対応してもらいました。相当苦しい状態のSPO2なのに、ボーっとして脱力している西田さんの様子が、とても不安で恐怖でした。酸素マスクをつけるとSPO2は上がるが、はすすとすぐに下がるという状態。とにかく、西田さんが呼吸しやすいように、吸入と呼吸介助を繰り返すしかありませんでした。ハワイに近づき高度が下がるにつれて、自分でSPO2を上げることが出来ました。外も見えて、飛行機が到着すると西田さんにも笑顔が見られ、一気に安心しました。この時は、無事に日本に帰れるのだろうか・・・と不安がつのりました。

パーソナルケアセンター 林

